

# 小田原史談

第29号 史談会  
小田原市幸二丁目  
発行所 小田原市幸二丁目  
郷土文化館

印刷の御用は  
清水印刷

小田原市幸一ノ一七  
電話小田原三四七七番



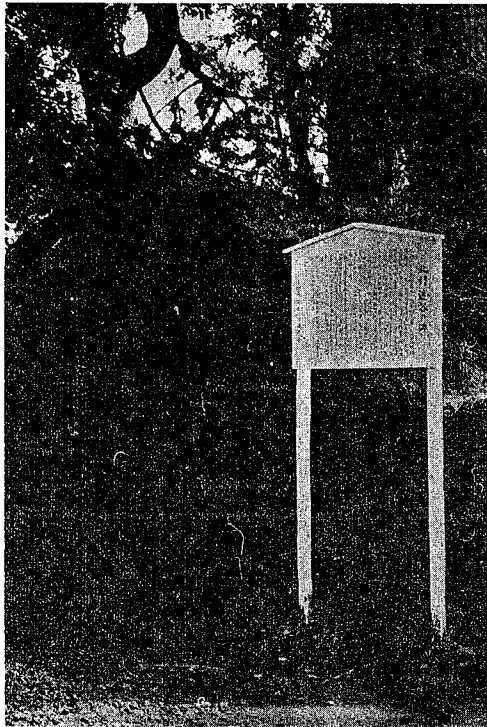
## 北村透谷

写真・北村透谷と  
城内公園に  
ある石碑

情熱的な人生詩人として明治文学の先覚者として、近代文学史上に不朽の名を留めた北村透谷は、明治元年小田原藩士の家に生まれて本名を門太郎といひ、はやく上京して京橋泰明小学校に学び、神童として名を知られた。  
その頃、既に当時風潮にかられての政治に志したが、人生問題に悩むに至って素志を齎し、文学を以って世に立った。

いま城址公園内郷土文化館前に建つ透谷の碑は昭和二十九年小峰の大久保神社境内より移されたものであるが、この碑の建設について去る昨年東京毎日新聞「近代文学のあと」欄に「生き返った心の詩人」として当時の状況を記しているの、その一部を抄録する。  
大正七年小田原市万年町四丁目の透谷の生家の跡に、記念碑を建てよう、と、詩誌「民衆」によつていた福田正夫ら小田原の詩人たちが県庁に許可を申請したが、いつ

明治二十五年同志と共に雑誌「文学界」を創刊し、透徹せる理路と激越なる熱情を以って文壇を風靡するにいたつた。  
透谷は自由党の石坂昌孝の女美那子を娶り、前川村の長泉寺に寄寓したが、當時は文筆の報酬はきわめて少なかったたので、その生活は恵まれず、新家庭は頗る窮乏したものであった。  
透谷は理想と実際との板狭みになつて懊悩また懊悩で、遂に自殺して世を去つた。時は明治二十七年五月年僅に二十七才であった。その生涯は極めて短かつたが、その文章は明治文学の珠玉となつて光彩を放つに至つたのである。



透谷碑自然石に藤村の碑文を刻す

までたつても許可がおりない。ただしてみると「不浄の死をとげるような文弱の徒で、作品にも危険性がある」という理由。

時流とかけ離れた高い理想を追うあまり、二十七才の若さで失意のうちに自殺した天才の死が理解されてい

なかつたのである。  
昭和三年になつて、親しい友人であつた島崎藤村が「透谷は清純な詩人であり、精神界の勇者として、刀折れ矢尽き、倒れてのちやむの心から、この世を辞し去つたものである」という趣旨の「答申書」を提出してようやく許可がおりた。

相模湾を見降ろす大久保神社の境内に碑が完成したのは、はじめ計画されてから十一年目の昭和四年七月。それが場所が不便で人目につかない。郷土の生んだ天才を讃えるには、もっとよい場所、というので昭和二十九年城址公園の広場に移された。碑の中央には「北村透谷に献す」その左に小さく、万物の声と詩人、情熱、一夕鶴、双蝶のわかれ、みみずのうた、精神の自由、内部生命論、富嶽の詩神を思ふ、星夜、蓬萊曲と代表作がぎざまされてゐる。書は藤村、まわりは自然石を寄せかけたもの形のままで。  
生家のあとにも「北村透谷誕生の地」の石碑が建てられた。

不遇に死んだ反骨の天才の思ひは、果してどんなものであろうか。

## 透谷夫人の話

北村透谷夫人美那子さんに会つた話を作家舟橋聖一氏が発表されている(一月二十九日朝日新聞朝刊「私の会つた人」欄)参考になる点が多いので摘録した。

その頃、私は(聖一氏)「文学界」に「北村透谷」という小説風につづつた伝記を書いた。これが島崎藤村氏の目に触れたのか連絡があり、「よかつたらお話しに來ないか」という旨に、三十代の私は感激して、麹町のお宅に参上した。

藤村氏は、すでに七十才の老大家だったが、私のような若造に対しても、いんぎん丁重に應對された。約三時間近く、透谷の話をつたが、私の原稿につき、透谷とはかの同人との間に、特にこれという友情の対立やもつれのなかつたこと、透谷と斎藤冬之の恋愛の燃焼は疑問であること……などを指摘された。

帰るとき、先生は女関へ座ってアイサツされ、且つ透谷夫人美那子さんにお会いなさるといいますすめられ、電話をかけておいてあげようとして下さった。

それで私は、数日後未亡人を訪問して、透谷生涯のお話を聴き、伝記の取材を果すことが出来た。美那子未亡人は長い間、府立第八高女の英語の先生をしていたので、その教え子の蛭子八重子さんから、次のような手記を見せてもらったことがある。

「冬の寒い日でも、次の時間が北村先生ですと、雑巾がけして、シーンと水をうったようにして、迎えました。好ききらいの劇しい、潔癖な先生で、不機嫌なときは、身体中が震えるように可憐なのに、ホンモノに触れているという実感が打ちのめされ、全身を耳にするほど緊張しずにはいられてしまいました。

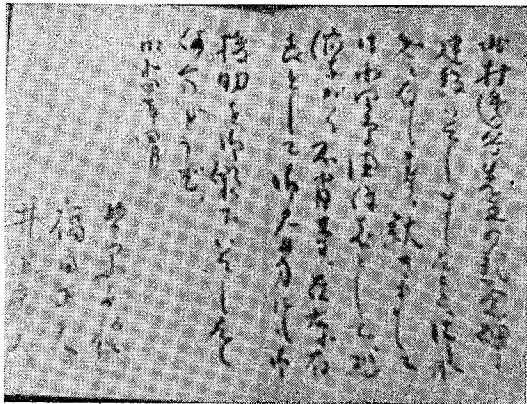
「透谷は純粋な、偉い人でしたよ」とつぶやくように言われた時と、それから遠足で、小田原の透谷の碑の前で休んだ際(碑が小峯公園大久保神社境内にあったころか)生徒が芝生に咲くスマイルを摘みましたら、大きな声で叱られました。五年間の学生生活の中で、透谷について何か仰ったことは、この二度だけでした。亡き夫を、心深く大切にしていられるのだと感じました」

右の外、美那子さんの発言がきれいだったこと、腫がすばらしく美しく、匂いに敏感だったこと、伊藤博文が大きらいで、教壇でも非難ははじめたことなど、私は蛭子さんから聞かせてもらった。

世田ヶ谷の北沢のお宅で、私が会ったのは、美那子さんの亡くなるほんの一年前で、お齡も七十の半ばにありました。しかし若い日の透谷を夢中にさせ、駒町の女子学院に通学中、周囲の反対と闘って、恋愛結婚のハンリを行った往年の才女であることは、一目見るなり、うなずけるものがあった。私が最も詳しく聞いたのは、数奇屋橋の煙草屋の二階で透谷がやり損った剃刀自殺と、それからまた半年程した明治二十七年月明の五月十五日の夜、ひとり書斎を抜け出し、芝公園の雑木に縊れて、自らその生を閉じた前後の事情だった。

はじめ美那子さんは、語りにくそうに顔を閉じたり、遠くの人を拝むような素振りを見せたが、やがて話し出すと、スラスラよまなかつた。透谷の死は決して発狂ではなく、また死の養美でもない、と強調した。「四、五日前でしたよ。私を呼ぶから行ってみると、どうも変だ。頭のせいかも知れないが、肛門が開いてちゃうような気がするんだ。そんなことを言いましたの」

と、極秘のことまで、話してくれた。縊れた木も、ことさら大きい樹ではなく、わりに背の低い平凡な杉の木でしたという話も、そのとき聞いた。私は「北村透谷」を書き上げて間もなく昭和十七年四月十日に慶応元年生れの北村未亡人は、ついに世を去られ、つづいて約一年後に七十二才で藤村氏が逝去せられた。



碑建設費募集趣意書(郷土文化館陳列)

啓 此度神奈川県小田原町に、島崎藤村先生をはじめ、郷土有志故北村透谷の友人等にて發起、北村透谷先生の記念碑を建設いたしましたこと、御承知と存じます。就きましては小田原関係者として、恐縮ながら不肖等、在郷の有志として御援助を御願いたしたく和四年四月

北原白秋  
福田正夫  
井上康文

### 透谷の詩

透谷は多くの詩を残して

いる。その中より「双蝶のわかれ」と「一点星」は琵琶歌にもうたわれているので次に記す。

#### ○双蝶のわかれ

一つの枝に二つの蝶 羽を取めて休らへり 露の重荷に下垂る 草は思ひに沈むり 秋の無情に身を賣めて、花は憂ひに色さめぬ言はず語らぬ蝶二つ 齊し立ちて舞ひ行けり 後を見れば野は淋し 前に向へば風寒し 過ぎにし春は夢なれど 迷ひ行衛は何処ぞや 同じ憶みの蝶二つ 重げに見ゆる四つの翅 並び飛びても冷く渡る 秋の剣の恐ろしや 雄も雌も共にたゆたひて 元来し方へとしはれ行く 元の一枝をまたの宿 暫しと憩ふ蝶二つ夕告げ渡る鐘の音に 驚きて立つ蝶二つ ことばは別れて西東 ふり返りつつ去りにけり。

#### ○一点星

眠りては醒め、醒めては眠る秋の床 結びては消へ 消へては結ぶ夢の跡 油や尽きし灯火の みるみる暗になりゆくに なかなかに細りてはゆかぬ 胸の思ひぞ怪しけれ 罪なしと知れども憎き枕をば かたへに投げて膝を立つれど 千々に乱る麻糸の 思ひを消さんよしはなし 今見し夢を繰返し 占ふ行手の浪高く 迷ひ初めにし恋の港は何処なるらむ 立出でて 窓を開けば戸の方は 行来忙し暴風雨を誘

### 文苑

小田原小笹会

炭(当座題)

病む夫の寝息うかがひ大火鉢炭さへ添へぬ湯気立てむとて

草次 鈴子 あたたかに炭つき添へて夫を待つ木枯ささび霜さゆる夜半

筑紫 汀 今日もまたつとめを終へてあれこれと炭をつぎつとおもひめぐらす

慎 独(兼題)

佐藤 春子 たなごころ合せて亡夫に誓ひける道一筋に生きむとぞ願ふ

同 身にすぎし願ひは持たず 独居の日々つつしむ生ある限り

立松 貞子 思ふことなし得て又も年送るわが身恥つつひとり慎しむ

# 小田原を中心とした

## 大正時代の政治家

K・O 生

戦災で東京小石川を焼け出され、小田原に移って十九年になるが、元々久野で大正八年迄育った。その後大正十四年迄八高東大で寮下宿の学生生活を送ったが休暇には久野に帰省したので当時の小田原のことがいろいろと記憶に残っている。所で父が明治後半期から大正十一年亡くなる迄、県郡・村会議員・久野村長等を勤めたので、当時の小田原の政治家と交遊があったから、小学校から小田原八高時代に相当彼等の思い出がある、少し書いてみよう。

小田原市議長長谷川夷氏の祖父豊吉氏が日露戦争頃から明治の末頃迄回数代議員になられたことは、今でも土地の故老の間で語り草となることがあるが、私も時折来訪されたので顔を覚えていた。デブッリして福々しい顔立ちの老人であった父は何日もその選挙を手伝っていた。たしか明治四十

四年の総選挙で当選されたが、相当の違反が出て氏も失格された様に記憶している。父も警察へ呼ばれたがブチ込まれないで済んだ。その頃松田の中村舞次氏も一度当選された。上郡及び下郡の郡長を勤められ、后行政裁判所評定官になられた。勤任官だと云うので小田原、足柄上下辺りでは大騒ぎをした相で、辞められてからも「評定官」と云う通称で通っていた。選挙では長谷川氏と同様に違反で結局失格された様に覚えている。長命され、私は大正十三年ある私用で松田の御宅を訪問し、古い政談を面白く聞かされた。その時の話では伊藤博文公と親しく、その推選で行政裁判所に入った相である。大正五年寺内内閣の解散の折、大磯の中川隣之輔が当選された。松田の生れで大磯の中川家の養子となつた人で、漁業家でもあったので、小田原や上郡で相当

の票を集めた。この選挙では当時酒匂のプリ王として有名だった川辺正之助氏が奥さんの兄の小塩八郎右エ門氏(中郡戸田の人、県内有数の大地主)が古い議員として相変わらず出馬したにも拘らず、漁業団体から中川氏を推し、ある晩父の所へ氏と二人でやって来て氏を応援する理由を説明して応援を頼み込んだ。父は中川氏の強力な後援者吉田清太郎氏(松田の古い親戚当時東京在住)からも強く依頼されたので、氏を応援した。至って聰明な人だった。至って聡明な人だった。が荒っぽい政治家型ではなかった感じがした。大正九年、秋の原内閣の解散の折に当選した森格氏は三年位前から熱心に準備しており、何時も年賀状や暑中見舞を呉れた。

同年春の休暇の折に、ある院氏が高梨町清遊館主人の高梨久五郎氏と二人で人力車でやって来た。そして父に何れ原氏が解散することとは確実だから、その節は宜敷頼むと強く談じ込んでいた。「私は二十台から支那で苦勞し、三百万円(今ならば十五億円位)位の財産があります」など元氣の良い調子でまくし立てて、帰る時私と弟の勇の二人に「ノートでも買いなさい」と云って捨門宛られた。大正十三年氏の再出馬の折のことは知らないが、この時は落選した。何でも前回にフンダンに金を使ったが、地元の上郡ではボスが大部分フトロコロに入れ、下部に余り廻さなかつたことが大きく祟った相である。この時には金廻りも良くなかつたことも原因していたらしい。

小田原紡績を誘致したり箱根登山(当時の小田原電鉄)の重役を買って出て、震災後の復旧に努力したり下會我駅を新設したり、随分地元に残したが、その後横田千之助氏の地盤を継いで栃木県に移り、小田原とは殆んど無関係になった。この折に泰氏を破って出たのが平川松太郎氏で、以後後戦中亡くなる迄約二十年余引続いて当選した。誠実な人柄で、選挙には頗る熱心であったが、地味な性格で政治家としては余り目立なかつた。併し職業の弁護士は、代議士出馬前から頗る流行っていた。

私は昭和の初め頃一度東京富士見町のお宅へ訪問したが、落付いて誠実で、政治家らしいガサガサした所が一向に見えなかつた。次に県会議員に移つてみよう。右の中川代議士の頃で書いた松田の吉田清太郎氏は明治の後半期に三回位上郡から選出された。私の古い親戚で、土建屋であり、明治二十年頃に東海道が出来る時に、国府津・山北間を請負つたと云う古い男で、私が中学生の頃は七十位の老人であった。晩年は東京に住み、私も懇意にしており、昭和十年頃八十余才で亡くなられた現在孫の三郎氏が庶子の旧宅に住んでいる。その頃下郡(小田原を含む)では河野治平、吉田義之の二人がよく出られた。河野氏は政友会で一郎氏の父であり、ズッと県会に続いて出て、永く議長として令名があつた。バリバリと腕を立てる方で、終戦後迄長命された。父は政友系だったのでから何時も氏を応援した。河野氏に対抗したのが民政党の吉田義之氏である。

暗がりに涼めと肌は脱がぬものと句をば思ひて独り慎しむ  
清水専吉郎  
冬の父母の法事の歸るさに墓前にひとりつつしみぬかづく

廣沢十五夜  
春の雲遠く静かに日を得たり  
受験すむうすらひに髪はほけたる  
麦の芽の朝なきように聳て  
遠く近く陽炎の立つ磯の景  
春光や樹々の雫も静らなり

われわれの往くところ美  
のないところはない  
もしわれわれの注意深い  
眼が、見られたら一事一物  
のなかに、またその粗末  
な装いを通して、それを  
探求することさえでき  
ば  
(マンズ・フェリヤ)

小田原銀座吉田薬局の先代で、芽ヶ崎の伊藤家から養子に入り、東京専門学校(早大の前身)で、県の民政党の重鎮として有名だった。副議長もつとめ、何時も言動がハッキリとして、特長のある政治家であった。氏の行動で深く記憶に残っているのは、常に小田原町の水道布設に大反対しておられたことである。

その理由は忘れたが、恐らく当時の小田原町は割合に飲料水に恵まれ、またこれと云う工場もなかったから、その金は外の有益な施設に廻すべきだと云う点にあったらしい。

酒匂の川辺辰二氏も一度当選された。中川代議士の頃で、紹介した当時ブリ成金で有名な正之助氏の二男で元気の良い人だった。

静岡県で漁業を営んでおり選挙好きで若い頃から誰の選挙でも活発に応援していた。

それから大正時代には表面、政界から引退していたが、相当勢力を持っていたのが蓮正寺の小沢衡平氏と谷津の岡田宣吉氏の二人である。

小沢氏は小沢病院主三郎氏の父で蓮正寺に生れ、政治好きで公共心に富み、明治中頃に県会議員や富水村長をつとめ、殊に当時酒匂川の址が洪水で度々決壊した折にその復旧に努力したことは県下でも有名になっており、その功勞で藍綬褒章も授けられた。

又地方金融の為に明治中頃に富水・二川・久野・声子の四村の有志を中心に足柄銀行(その後静岡銀行に合併)を創立し、大正十一年亡くなる迄二十余年間頭取として活躍された。

真面目な人だったが酒好きで、時折筆へ見えると父とユツクリと飲み、肴にはアツサリとしていて、何を出して

「コレハウマイ」と云って平げ、相当飲んでもシツカリとしておられた

岡田氏は二宮に生れ、真鶴の岡田家の養子となり、家業の雑貨商の旁ら柑橘の發展に尽し、日露戦争前谷津・荻窪辺が蜜柑に有望なことを見て谷津に居を移して地元とその栽培を奨励し、果農業界の大立物として知られ、永く農工銀行の重役をつとめられた。

八十余才の長命を保たれ昭和十年頃亡くなられた。アゴヒゲのある気品のある老人だった。小田原市議だった勝氏はその孫である。当時四十年前のことであり、その頃のことをよく知っているのは元県議の小西尚三郎氏位になってしまった。私の印象は大体中学生迄のことであり、当時の政治家が羽織ハカマで人力車で飛び廻ったり、田舎道

編集後記

をユツクリと歩いていたことを思い出すのもなつかしい印象である。

▼史談会編集を仰せつからってから一年、期間の満了によってバトンを他に渡すことになりました。思えばこの一年間不才の身でありながら、ともかくも毎号つづけて来たことは、皆さまのご後援のたまもので、衷心感謝にたえませぬ。同時に編集の経験に乏しく、読者各位の不满を買ったことを深く御わびいたします。

▼今後誰が編集を引受けられるか知りませんが、引続き皆さまのご後援の下に、会報発行の意義をより以上に高めていただくよう祈ります。しかして私の望むところは、平生の持論である「小田原の史実を収集して永遠に残すこと」を史談会の事業として実行に移していただきたいことです。

▼それには相当の経費も必要もありましようが、幸い副会長の中野敬次郎氏は郷土史家の権威者であり、その他多くの斯道経験者もあつてのことですから、一臂の力をおしむことなく、奮起してこの事業に傾注されることを切望してやみませぬ。

▼では、皆さまの一層のご自愛ご健勝を御祈り申し上げます。(斐田記)

<p>各種竹製品製造卸 干梅 発売 元</p> <p><b>中島 観光物産 商会</b></p> <p>小田原市幸3~485 TEL 5 0 1 9</p>	<p>日本銘菓指定店 神奈川県指店銘菓店</p> <p><b>山口 菓子舗</b></p> <p>井細田店 小田原駅前店 TEL 2 2 1 5 箱根湯本店 // 5 6 4 1</p>	<p><b>報徳証券株式会社</b></p> <p>小田原市幸1~162 電話 ☎ { 6128(代) 7 5 3 7</p> <p>利殖の早途は証券投資から 安全確実な利殖投資</p>
--	---	---

<p>セトモノの御用は (陶磁器・陶管・植木鉢)</p> <p><b>大川 商店</b></p> <p>TEL 8 5 1 3 ・ 3 0 5 5</p>	<p>浄化槽の清掃修理</p> <p>小田原市緑1の47</p> <p><b>小田原 衛生株式会社</b></p> <p>電話 ☎ 5 8 6 1 ・ 2 4 6 8 番</p> <p>取締役社長 鈴木 浩</p>	<p>電気工事一式・設計・請負 販売 修理</p> <p><b>兵藤 電気商会</b></p> <p>小田原市下曾我駅前 電話 國府津(47) 3 5 7 8 番</p>
---	---	---

<p>御料理 仕出し 御弁当</p> <p><b>東 華 軒</b></p> <p>代表取締役 飯沼相三郎</p> <p>小田原駅前 TEL (0465) 5061~2</p>	<p>楽しい生活 明るい読書</p> <p><b>八 小 堂</b></p> <p>小田原駅前 TEL 5388~9</p>	<p><b>志 澤</b></p> <p>TEL 3 1 3 1</p>
--	--	--------------------------------------